

博士学位請求論文要旨

論文題名 貸本問屋の研究

提出者 松永瑠成（中央大学大学院文学研究科国文学専攻博士課程後期課程4年）

1 論文の主題（テーマ）、当該研究分野における位置づけ

近世・近代の日本において、長らく娯楽的な読み物は自ら購入するよりも、貸本屋から借りて読む方が一般的であった。それは人々が自らの読書体験を振り返った回想類のほか、蔵書目録や営業文書、あるいは書籍に貼付された摺物や押捺された蔵書印などから浮かび上がる貸本屋の蔵書内容を一瞥すれば明らかである。したがって、娯楽的な読み物の受容を考える上で、貸本文化からのアプローチは有効であるどころか、必要不可欠だといっても過言ではない。

貸本屋の蔵書内容は、具体的にどのような書籍が貸本をとおして読まれていたかを如実に物語る。近世期の貸本屋が蔵書を形成するまでの過程、特に書籍の入手に関しては長友千代治氏が『近世貸本屋の研究』（東京堂出版、1982年）のなかで、4つの方法を提示している。すなわち、①版元からの直接購入、②貸本屋からの購入、③「貸本類仕入所」や「古本売買所」などからの購入、④貸本屋自身による制作（特に写本）の4つである。このうち①③については、貸本屋旧蔵本にみられる広告や摺物から書籍の仕入れ方法を分析した長友氏の前掲書および『江戸時代の図書流通』（思文閣出版、2002年）のほか、馬琴の書簡に基づく調査により、貸本屋が版元から読本を購入していく様子を浮かび上がらせた浜田啓介氏の「馬琴をめぐる書肆・作者・読者の問題」（『近世小説・営為と様式に関する私見』京都大学学術出版会、1993年所収。初出は1953年）がある。こうした研究をとおして、貸本屋がどのようにして書籍を入手したかが明らかになった時、初めて「版元→貸本屋→読者」という版元から貸本屋、そして貸本屋から読者へと書籍が行き届くまで、換言すれば、娯楽的な読み物の出版・流通・受容を1つの流れとして捉えられるようになる。しかしながら、版元・貸本屋間の書籍の動きについては、近世だけでなく近代においても、未だ十全に明らかにされているとは言い難い。

博士学位請求論文（以下、本論文）では、こうした版元・貸本屋間における書籍の動きを明らかにすべく貸本問屋に注目する。第1章第1節「丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——」で定義するように、貸本問屋とは「貸本向けの書籍を出版・蔵版し、それらを卸す問屋としての機能を有した書肆」であり、先の図式でいえば「版元」に位置する存在である。このように貸本問屋は、貸本をとおして受容される娯楽的な読み物の起点に位置するにも関わらず、その実態は今なお詳らかになっていない。だが、前述した娯楽的な読み物の「版元→貸本屋→読者」という流れを捉える上でも重要であるため、貸本問屋がどういった書籍を、どのように出版・流通させていたかという実態解明はなされなければならない。

貸本問屋のうち、本論文では文溪堂丁子屋平兵衛・文永堂大島屋伝右衛門・聚栄堂大川屋錠吉を取り上げる。それぞれ近世後期から近代にかけて活躍した代表的な貸本問屋である。彼らの活動時期は多少重なる部分があるものの、大別すると近世後期（丁子屋）・近世後期～近代初頭（大島屋）・近代初頭～近代末葉（大川屋）となる。つまり、それぞれの活動とその意義を調査・研究することは、貸本問屋の実態解明に留まらず、近世・近代におけるその史的展開をも明らかにすることとなる。また、本論文ではあわせて近世・近代の貸本屋の具体的な蔵書内容や営業の様子をも明らかにしていく。これにより、丁子屋・大島屋・大川屋ら貸本問屋を起点に出版・流通した娯楽的な読み物が、貸本屋をとおして受容されるまでを1つの流れとして捉えることが可能となる。

以上のように、娯楽的な読み物の出版・流通・受容、そして貸本文化を考える上で貸本問屋という存在は重要である。本論文で丁子屋・大島屋・大川屋らを取り上げることにより、近世・近代といった時代区分に囚われない、一貫した貸本問屋史、そして娯楽的な読み物の出版・流通・受容の歴史を紡ぐことが期待できる。

2 論文の構成（目次・各章の概要）

本論文は、貸本問屋の実態解明とその史的展開を明らかにする第1章および第2章、個々の貸本屋の様相と変遷を取り上げた第3章に序章・終章を加えた以下の全5章から構成される。

序章 貸本問屋の研究とその意義

第1章 貸本問屋の史的展開

第1節 丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——

第2節 「中本」受容と大島屋伝右衛門

第3節 大島屋伝右衛門と池田屋一統——売薬「処女香」を端緒として——

第4節 黎明期の初代大川屋錠吉

第2章 貸本問屋の出版書目

第1節 丁子屋平兵衛出版書目年表稿

第2節 大島屋伝右衛門出版書目年表稿

第3節 初代大川屋錠吉出版書目年表稿

（参考）第二十三回大川屋出版小説図書総目録（明治三十二年八月改正増訂）

第3章 貸本文化の変容とその諸相

第1節 貸本屋の諸相

第2節 誠光堂池田屋清吉の片影

第3節 近代金沢における書籍受容と春田書店

終章 本論文の到達点と今後の課題

第1章「貸本問屋の史的展開」は、丁子屋平兵衛・大島屋伝右衛門・大川屋錠吉ら、それぞれの活動とその意義を明らかにするなかで、近世から近代における貸本問屋の実態とその史的展開を通観するものである。

第1節「丁子屋平兵衛の躍進——貸本屋世話役から貸本問屋へ——」では、丁子屋平兵衛が貸本屋世話役から貸本問屋となり、その地位を確かなものにしていくまでの過程を書籍の売捌と貸本

屋に向けられた販路の形成といった点に着目して明らかにした。まず、3代続いた歴代平兵衛の系譜を再検討し、初代平兵衛が貸本屋・版元としての土台を築き上げたこと、また2代目が兄である大坂屋半蔵を介して曲亭馬琴との距離を縮めていき、その著作を刊行するなかで丁子屋が全盛期を迎えたことを指摘した。次に書籍の売捌に注目し、丁子屋が貸本屋世話役という立場を利用して自らの組はもとより、江戸市中の貸本屋に向けられた販路を形成し、書籍の売捌をおこなっていたことを明らかにした。最後に丁子屋が保持した全国規模の広域的な書籍流通網が、豊富な貸本向け書籍の蔵版や貸本屋に向けられた流通網を売りにして、江戸近郊の流通拠点となる書肆、そして上方の書肆と結びつくなかで築き上げられたと論じた。

第2節「中本」受容と大島屋伝右衛門」では、中本の版元として知られていながらも実態がよくわかっていなかった大島屋伝右衛門を取り上げ、その系譜と出版活動および具体的な書籍流通を明らかにするなかで、大島屋が中本受容に果たした役割について考察した。まず、これまで詳らかになっていなかった歴代伝右衛門の系譜を整理し、大島屋が3代にわたって続いていたことを明らかにした。次に初代および2代目伝右衛門時代の蔵版目録から、大島屋が中本の出版および求版に力を入れていたことを指摘するとともに、表紙文様や附載された広告から、そうした中本が明治まで印行されていたことを示した。そして最後に、大島屋伝右衛門の書籍流通網が江戸の書肆丁子屋平兵衛や上方の河内屋茂兵衛らの助力を得ながら形成されていたことを論じた。

第3節「大島屋伝右衛門と池田屋一統——売薬「処女香」を端緒として——」では、大島屋が精剤・販売していた売薬「処女香」を取り上げ、その広告や引札などを精査するなかで、大島屋と池田屋清吉をはじめとする池田屋一統との結びつきを指摘するとともに、彼らとの間で築き上げられた書籍流通網について論じた。まず、為永春水ではなく、大島屋によって処女香が精剤・販売されていたことを種々の資料から明らかにした。次に処女香の広告や引札からその売弘に貸本屋池田屋清吉が携わっていることを指摘し、最後に池田屋清吉・池田屋利三郎・池田屋幸吉ら池田屋一統との結びつきが、大島屋独自の流通網へと繋がったことを明らかにした。

第4節「黎明期の初代大川屋錠吉」では、講談本の版元として知られる大川屋錠吉（後の大川屋書店）の黎明期の動向と出版物に着目し、後に彼が貸本問屋として躍進できた要因を明らかにした。まず、従来から知られていた大川屋の貸本屋としての経歴を再検討し、その営業が明治28年ごろまで続けられていたことを明らかにするとともに、書籍の出版・取次・販売と並行して長らく続けられたこの貸本業が、貸本問屋として躍進を遂げられた1つの要因であったことを指摘した。次に明治10年代の出版物から浅草区の高梨弥三郎と瀬山直次郎との結びつきを指摘し、大川屋の当初の活動が同地域の書籍業者によって支えられていたことを明らかにした。最後に同じく浅倉屋久兵衛方で奉公していた経歴を持つ3代目大島屋武田伝右衛門は、大川屋とともに書籍の出版・求版をおこなうだけでなく、彼に貸本問屋としての道を歩ませる直接のきっかけであり、要因であったことを論じた。

第2章「貸本問屋の出版書目」は、大島屋・丁子屋・大川屋ら貸本問屋が出版・蔵版・求版した書籍を編年体で概観し、彼らの出版活動の変遷を明らかにすることを目的とする。これは貸本問屋の実態解明のみならず、貸本屋をとおして人々がいかなる書籍を受容していたのかを、貸本問屋の側から浮かび上がらせていくことともなる。

それぞれ第1節「丁子屋平兵衛出版書目年表稿」では丁子屋、第2節「大島屋伝右衛門出版書目年表稿」では大島屋、第3節「初代大川屋錠吉出版書目年表稿」では大川屋の出版書目を取り上げる。なお、大川屋関連の書籍は残存状況がよくないため、参考として明治30年代の出版・蔵

版の様子を窺い知ることのできる「第二十三回大川屋出版小説図書総目録（明治三十二年八月改正増訂）」を附録した。

第3章「貸本文化の変容とその諸相」では、丁子屋・大島屋・大川屋らが活躍していた時期、とりわけ幕末から明治・大正において貸本屋はいかなる変容を遂げていったのか、その様相を通観して貸本文化の流れを捉える。

第1節「貸本屋の諸相」では、反古として残された種々の記録類から、幕末に営業していた小林某と春日堂播磨屋伊三郎らの蔵書内容やその実態を明らかにした。

第2節「誠光堂池田屋清吉の片影」では、坪内逍遙も利用したことで知られる貸本屋池田屋清吉の実態を営業文書や旧蔵書などから浮かび上がらせた。

第3節「近代金沢における書籍受容と春田書店」では、石川県立図書館辻家貸本文庫の分析をとおして、金沢市尾張町で営業していた貸本屋兼古本屋の春田書店の蔵書内容や貸本業・古本業の実態を明らかにするなかで、同地における書籍受容の様相を明らかにした。

以上の構成により、本論文では貸本問屋の実態解明に留まらず、近世・近代における「貸本問屋→貸本屋→読者」といった貸本問屋を起点とする娯楽的な読み物の出版・流通・受容の流れをも捉えていく。

3 論文の独自性

貸本問屋について、前田愛氏は「個人営業の貸本屋を対象に、営業用の貸本の戯作小説・写本類を卸す問屋」（中野三敏ほか校注『新編日本古典文学全集 洒落本・滑稽本・人情本』小学館、2000年、421頁の頭注）とし、浜田啓介氏はその業態を「貸本屋向きの本を刊行し、貸本屋に仲間売りをする業態」（浜田氏前掲論文）としている。このようにすでに知られている存在でありながら、貸本問屋の実態解明はこれまでなされてこなかった。

本論文の独自性は、従来注目されてこなかった貸本問屋という存在に価値を見出し、その実態解明をおこなうのみならず、近世・近代の貸本屋の具体的な蔵書内容や営業の様子をも明らかにするなかで、「貸本問屋→貸本屋→読者」という貸本問屋を起点とする娯楽的な読み物の出版・流通・受容をも捉えていこうとする点にある。

4 今後の課題

今後の課題としては、以下の3つがある。

まず上方の貸本問屋の実態解明があげられる。本論文で取り上げた丁子屋平兵衛・大島屋伝右衛門・大川屋錠吉はいずれも江戸（東京）の貸本問屋であり、河内屋茂兵衛や河内屋源七郎など大坂をはじめとする上方の貸本問屋については、深く言及することができなかった。特に河内屋茂兵衛は第1章第1節および第2節で述べたように、丁子屋・大島屋の両書肆との結びつきが強い存在である。河内屋茂兵衛らの実態解明は、貸本問屋研究の深化のみならず、全国的な書籍流通の実情をも浮かび上がらせることが期待できるため、今後も進めていく必要がある。

今1つの課題は、大正以降の貸本問屋についてである。本論文では大正まで営業を続けていた大川屋を取り上げたものの、その考察は主として明治期に重点を置いたものであった。そのため、大正期の大川屋はもちろん、ほかの貸本問屋の実態についてはまだ不明瞭な部分がある。

最後の課題は、近代貸本文化研究の基盤整備である。明治・大正期の貸本屋については、書生を対象に学術書を貸し出した新式貸本屋を取り上げた浅岡邦雄氏および鈴木貞美氏の編になる『明治期「新式貸本屋」目録の研究』（作品社、2010年）や娯楽的な小説類を扱う貸本屋を取り上げた浅岡邦雄氏の「明治期貸本貸出台帳のなかの読者たち——烏山町越雲巳之次『貸本人名帳』をめぐって——」（『日本出版史料』4、日本エディタースクール出版部、1999年3月）や藤島隆氏の『貸本屋独立社とその系譜』（北海道出版企画センター、2010年）、高野肇氏の『貸本屋、古本屋、高野書店』（論創社、2012年）などの成果があるものの、事例の蓄積がまだ足りておらず、近世の長友千代治氏による『近世貸本屋の研究』（東京堂出版、1982年）や『近世の読書』（青裳堂書店、1987年）の如く体系的な成果が未だみられない。沓掛伊左吉氏の「貸本屋の歴史」（『沓掛伊左吉著作集 書物文化史考』八潮書店、1982年所収）をはじめとする近代貸本屋の沿革を描こうとした試みはあるが、いずれも粗削りの感は否めず再検討すべき点は少なくない。貸本屋がいつ、どこで、だれに、どのような書籍を貸し出していたか、という基本的な事柄から近代貸本文化研究に手を付けていく必要がある。